

40年間の生活の変化を時間で見る～社会生活基本調査の結果から～

政策統括官（統計制度担当）付統計企画管理官室企画官
（元統計局統計調査部労働力人口統計室調査官） 越 有二

ほぼ半世紀前の生活時間

総務省統計局は、今年の10月に、令和3年社会生活基本調査を実施します。この調査は最近始められたものではなく、初回の調査は、現在からほぼ半世紀前（45年前）の昭和51年（1976年）に実施されました。その後5年周期で実施され、前回の調査は平成28年（2016年）になります。この調査の特徴は、調査対象者が1日のうち何をどれくらい行っていたかを「時間」の観点から具体的に調査し、統計として示すことにあります。前回の平成28年社会生活基本調査（「平成28年調査」とします。以下、他の年次の同調査も「〇年調査」と表記します。）の結果と初回の昭和51年調査の結果を比べると、40年間の日本国民の生活の変化を時間の観点から見るができます。行動の種類（「睡眠」、「仕事」、「趣味・娯楽」など）とそれぞれの行動を行った者の1日の生活時間（総平均時間）に関する調査結果の一例を表1に示します。

表1 行動の種類別1日の生活時間（総平均時間）（昭和51年、平成23年及び28年）

行動の種類	平成28年(①) (分)	平成23年(②) (分)	①-②	昭和51年(③) (分)	①-③	行動の種類	平成28年(①) (分)	平成23年(②) (分)	①-②	昭和51年(③) (分)	①-③
1次活動	640	638	2	642	-2	3次活動	382	387	-5	327	55
睡眠	457	459	-2	485	-28	移動(通勤・通学を除く)	29	30	-1	16	13
身の回りの用事	82	80	2	60	22	テレビ・ラジオ・新聞・雑誌	138	150	-12	144	-6
食事	101	99	2	97	4	休養・くつろぎ	96	90	6	57	39
2次活動	418	415	3	471	-53	学習・自己啓発・訓練(学業以外)	11	11	0	9	2
通勤・通学	34	31	3	32	2	趣味・娯楽	46	44	2	30	16
仕事	224	225	-1	278	-54	スポーツ	12	12	0	8	4
学業	27	24	3	35	-8	ボランティア活動・社会参加活動	4	4	0	4	0
家事	87	91	-4	107	-20	交際・付き合い	17	19	-2	28	-11
介護・看護	4	3	1	...	-	受診・療養	8	9	-1	12	-4
育児	16	15	1	...	-	その他	19	17	2	18	1
買い物	26	27	-1	20	6						

注)・15歳以上に限定し、平日・休日を区別せず週全体についての結果

・昭和51年の以下の行動は一部定義が異なる。

(「学業」は在学者の「勉強・研究」。「家事」は「育児」「介護・看護」を含む。「学習・自己啓発・訓練(学業以外)」は在学者以外の「勉強・研究」)

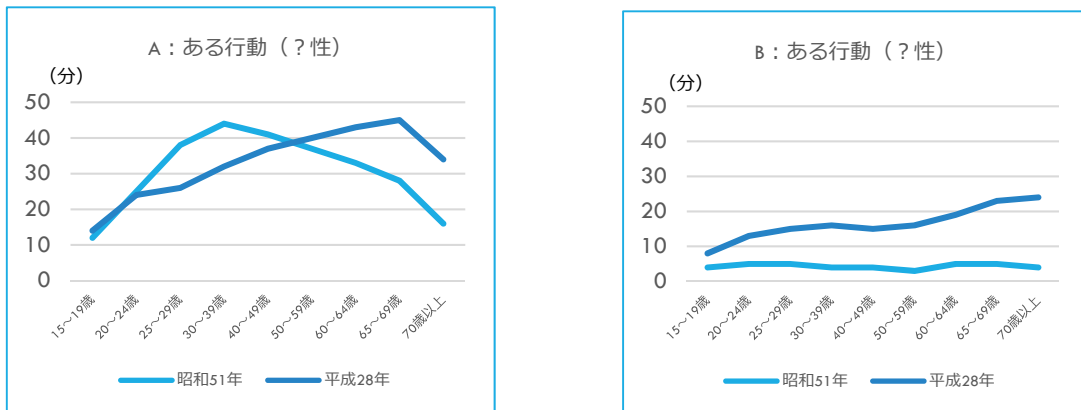
この表を見ると、ほとんどの行動で5年間の差(①-②)はそれほどありません(ほとんどが数分以内の差)が、一方で、40年間では大きな差があります(①-③)。これらの行動を年齢階級別にみると、男女のそれぞれの行動においてそのグラフの形に一定の特徴があり、それらの特徴は40年間で大きく変わっています。本稿では、このような特徴について、調査開始当初からの40年間のダイナミックな変化を見ていこうと思います。

何を表しているグラフでしょう？

ここでいきなりクイズです。

図1は、表1で掲げたうちのどれかの行動について年齢階級別の総平均時間をグラフ化したものです。昭和51年調査の結果と平成28年調査の結果とを比較しています。AとBの2種類のグラフがありますが、それぞれが男女のどちらかとなっています。では、図1はどの行動についてのグラフで、また、AとBのどちらが男女のどちらであるか分かりますでしょうか。

図1 年齢階級別1日のある行動の総平均時間-男女（昭和51年及び平成28年）



*このグラフは、平成28年社会生活基本調査（調査票Aに関する結果）時系列統計表第7表から作成しました。前掲の表1及び以降のグラフ（図2～図9）も同様です。年齢階級は5歳幅（「15～19歳」等）と10歳幅（「30～39歳」等）がありますが、同表によったものです。

答えは・・・？

分かりましたでしょうか。答えは「買い物」です。Aが女性のグラフでBが男性のグラフとなります。それぞれのグラフについて、昭和51年調査と平成28年調査の間の年次の調査結果の情報を入れると次の図2のようになります。

図2 年齢階級別1日の「買い物」の総平均時間-男女（昭和51年～平成28年）

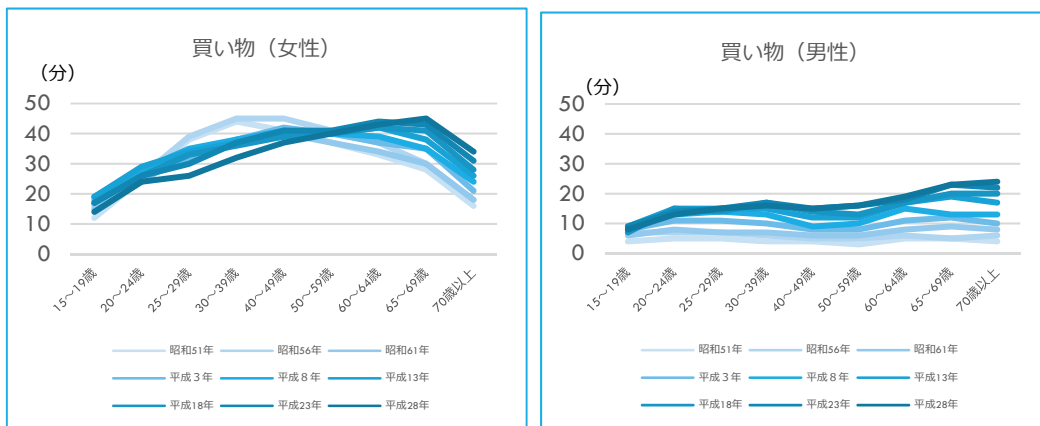
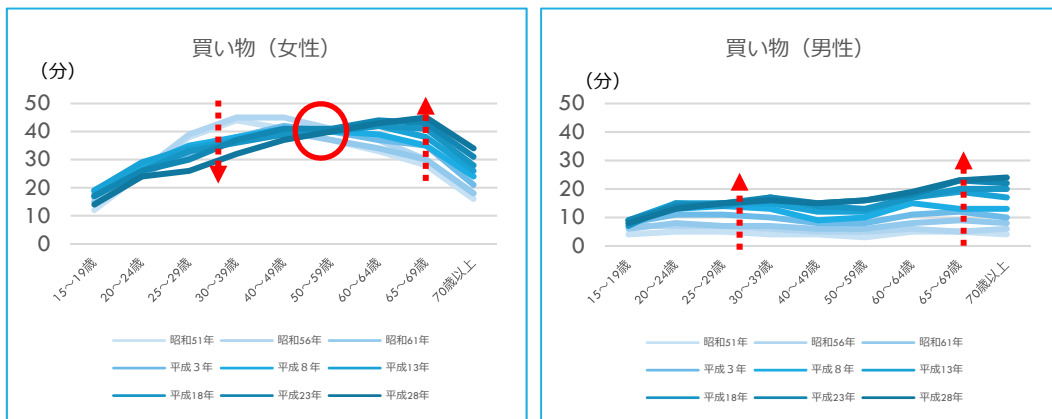


図2を見ると、昭和51年調査の結果では男女でそれぞれ特徴（女性は山型、男性は平地型）があり、年次が進んでいくにつれ、それぞれが一定の方向性を持ちつつ変化しているように見えます。女性は、30-39歳を頂上にした山型（昭和51年）だったのが、65-69歳を頂上にした山型（平成28年）に変化していますが、この変化の過程を見ると、若い世代は減少傾向にあり、50-59歳はほぼ変わらず、それより高齢の世代で増加傾向にあります。男性は、平地型（昭和51年）だったのが、いずれの年齢階級でも増加傾向にあり、特に比較的高齢の世代での増加幅が大きく、最終的に高齢の世代を頂点にしたなだらかな山型（平成28年）に変化しています。それらの変化を分かりやすく表現するために、図3では補助的に、変化の方向性を示す矢印や変化が小さい部分を示す丸印を加えました（赤色）。女性は50-59歳を結節点のようにして（丸印部分）若い世代と比較的高齢の世代とで逆の動きをしています。男性は全体的に増加傾向です。最終的には（平成28年）、全体的に男性が女性より少ないものの、男女で似た形のグラフになっていることが興味深いところです。

図3 図2のグラフにそれぞれの特徴を補足

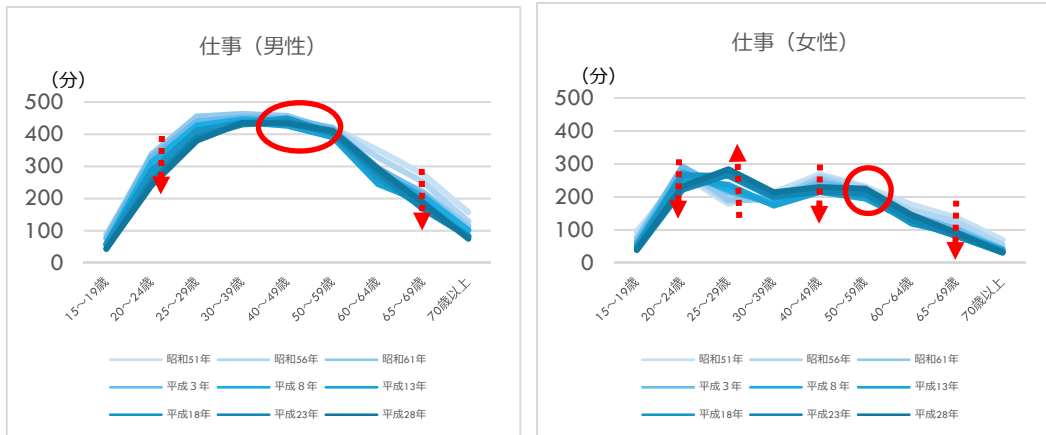


以下、他の行動でも同様に見てみましょう。

「仕事」の場合

「買い物」と同様「2次活動」とされている「仕事」の場合を見てみましょう。

図4 年齢階級別1日の「仕事」の総平均時間-男女（昭和51年～平成28年）

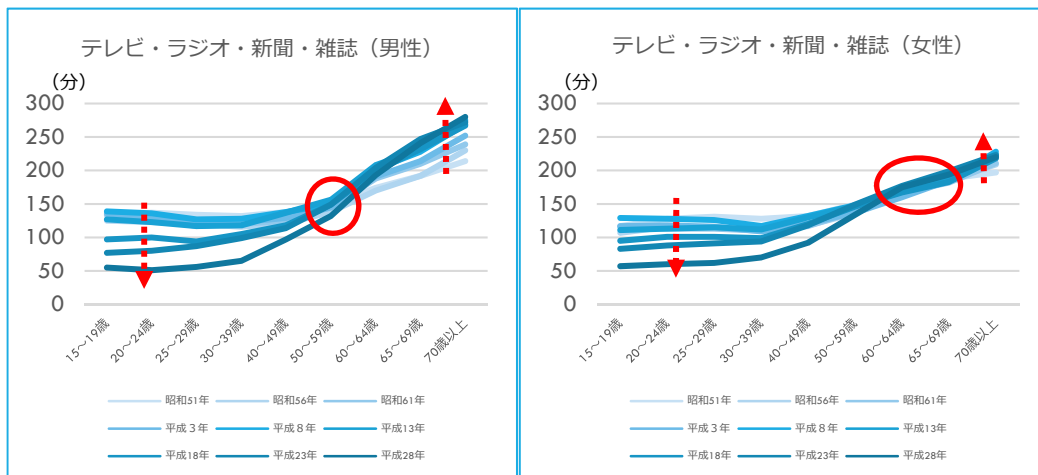


男性は結節点のような部分（「40-49歳」及び「50-59歳」）を挟んで若い世代と比較的高齢の世代で減少傾向に、女性は昭和51年ではいわゆるM字型であった部分のそれぞれのパーツの年齢階級で増加減少し、最終的には（平成28年）男性に似た形になりつつあるように見えます。

「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」の場合

以下「3次活動」を見てみましょう。「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」はどうか。これはテレビを見る、ラジオを聴く、新聞・雑誌を読むという行動です。

図5 年齢階級別1日の「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」の総平均時間-男女（昭和51年～平成28年）



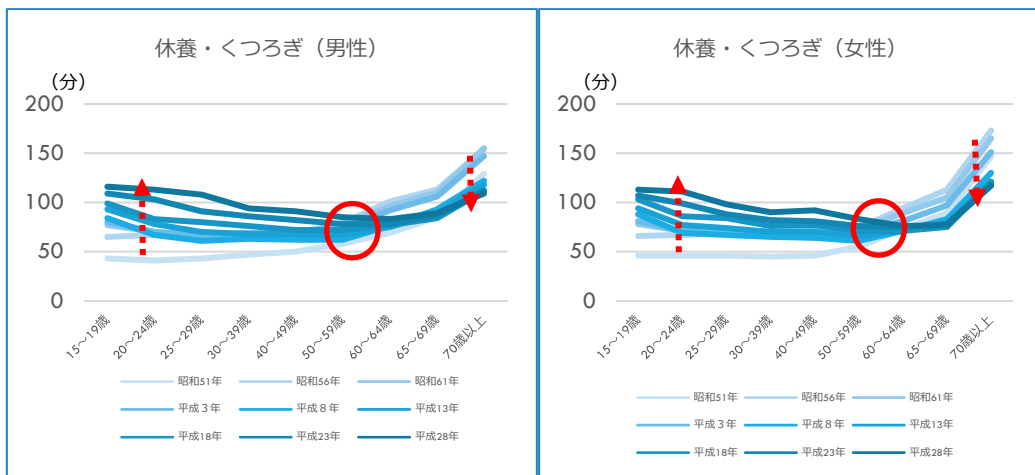
昭和51年調査の結果では、男性も女性も上の世代に向かってなだらかに時間が増えている状態だったのが、結節点のような部分を挟んで、若い世代で減少し、それより高齢の世代で増加している傾向が見受けられます。男性は50-59歳が比較的是っきりと結節点のようになっていますが、女性は多少分りにくいものの60-64歳及び

65-69 歳で結節点のようになっており、男女で少しばかり形が異なるように見えます。

「休養・くつろぎ」 - 「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」と反対の動き

「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」と反対の動きをしている行動もあります。「休養・くつろぎ」を見てみましょう。

図6 年齢階級別1日の「休養・くつろぎ」の総平均時間-男女（昭和51年～平成28年）

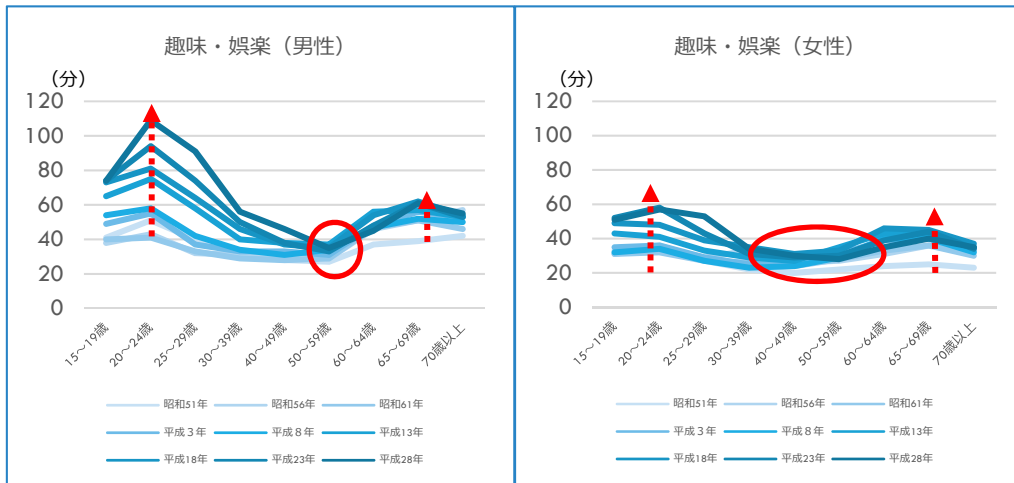


「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」が減少・増加する代わりに「休養・くつろぎ」が増加・減少しているとまでは一概には言えませんが、興味深い動きだと思えます。

男性の50-59歳で結節点 - 「趣味・娯楽」

全体的に増加傾向にあるものの、50-59歳辺りで動きが小さい（結節点のようなものが見られる）「趣味・娯楽」を見てみましょう（男性の「仕事」の動きとは逆）。男性に比べて女性は、結節点のような部分が少し広い年齢層にあるようです。

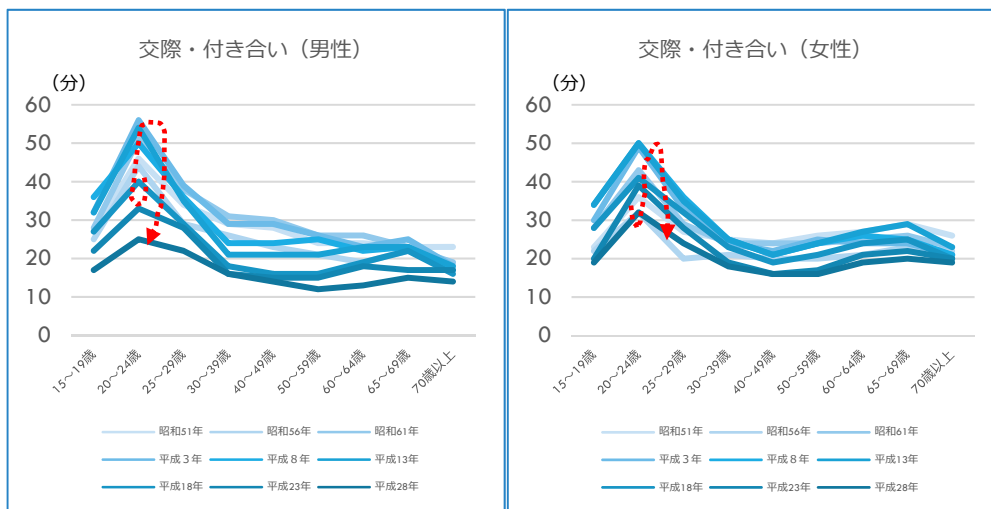
図7 年齢階級別1日の「趣味・娯楽」の総平均時間-男女（昭和51年～平成28年）



動きが分かりにくい例 – 「交際・付き合い」

これまで比較的動きが分かりやすい行動を見てきましたが、イレギュラーな動きをしているものもあります。「交際・付き合い」の場合を見てみましょう。

図8 年齢階級別1日の「交際・付き合い」の総平均時間-男女（昭和51年～平成28年）

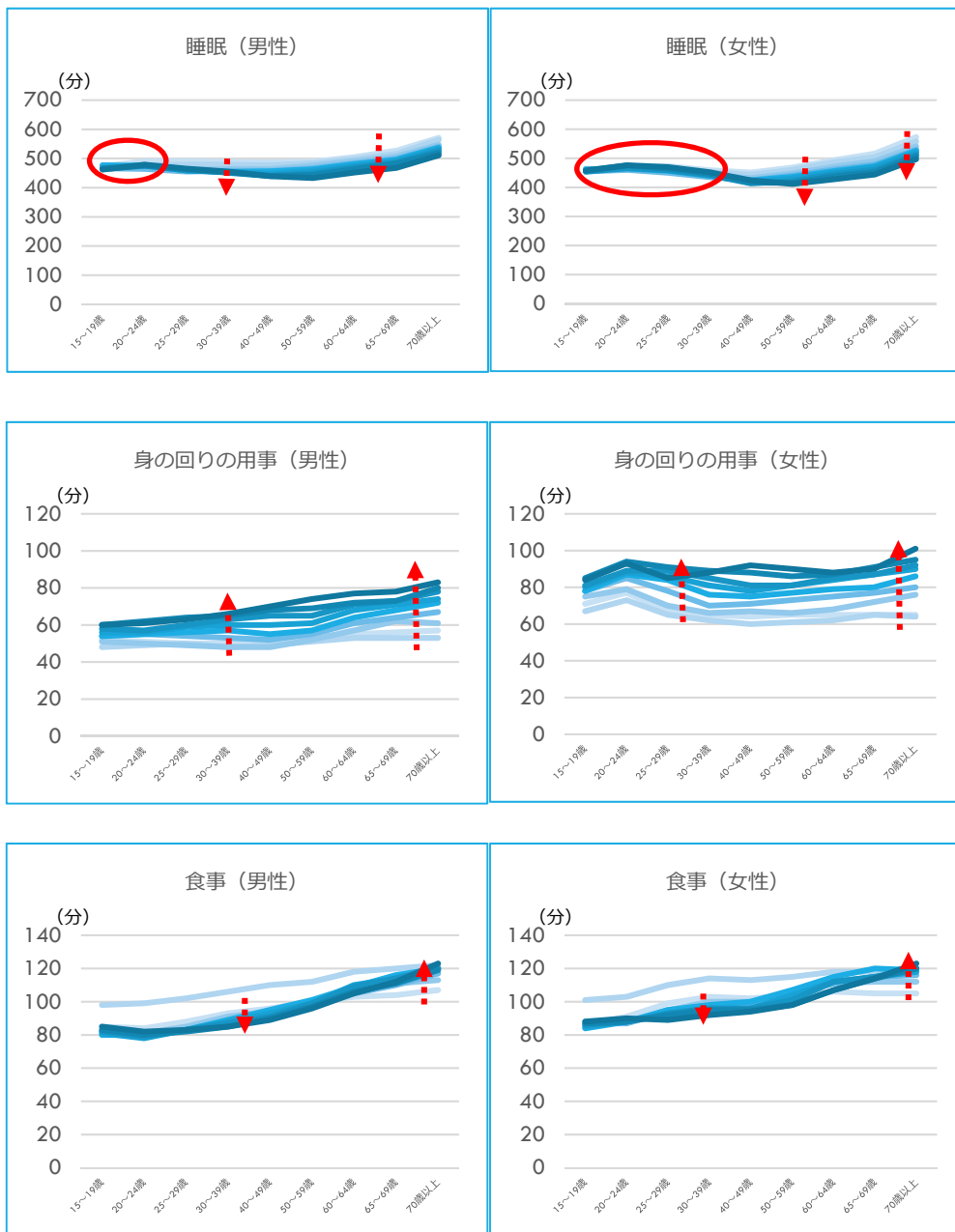


昭和51年調査の結果では、男女とも、20-24歳の年齢階級で「交際・付き合い」にかかる時間が長く、それ以外の年齢階級で短い傾向が見られました。その後、それぞれ増加減少を繰り返しながら、そのような傾向が更に明確になったこともありましたが、平成28年調査の結果においては、年齢階級間の差が小さくなっています。また、全体として「交際・付き合い」の時間が減少傾向にあるのは、実際に会う形でのコミュニケーションの時間が昔より減少しているということもあるのだと思われます。これは、コミュニケーションに使う時間がそもそも減ったからなのか、スマホの普及などで実際に会わなくてもコミュニケーションが簡便に取れるようになったからなのかなどを具体的に分析してみる必要があるのかもしれません。

1 次活動の行動

これまで、2次活動及び3次活動の行動を中心に、いくつかの行動について特徴的な動きを紹介しました。一方、1次活動の行動は比較的単純な動きをしています（図9）。なお、1次活動とは、睡眠、食事など生理的に必要な行動のことを、2次活動とは、有業者の仕事、家事、学生の学業など義務的な行動のことを、3次活動とは、1次活動及び2次活動以外の全ての行動（個人の自主的な選択の下で自己啓発、健康の増進、生活の潤い、社会との結び付きを深めるなど積極的な意義も重視して設けられている活動）のことを指すものとします。

図9 年齢階級別1日の「1次活動」の行動の総平均時間-男女（昭和51年～平成28年）
 （※調査年次についての凡例は図2～図8と同様のもの。図内では省略）



「睡眠」は若い世代ではあまり動きが見えませんが、比較的高齢の世代で減少傾向にあります。一方、「食事」は特に高齢の世代で増加傾向にあります。「身の回りの用事」は全ての年齢階級で増加傾向となっています。

最後に

いかがでしょうか。時系列の動きのパターンも含めた行動ごとの特徴がある程度見えてきたのではないのでしょうか。これらのグラフを並べ比較することで、統計的な分析のアイデアが生まれることもあると思われます。

冒頭でも述べましたが、今年、令和3年社会生活基本調査が実施される年です。今回は、新型コロナウイルスの影響やスマートフォン等情報通信機器の普及などにより、生活様式の変化がより大きく見られる結果になるかもしれません。半世紀前の生活に思いをはせつつ、今年の調査結果が積み重なり、社会生活基本調査の結果が私たちの社会生活の分析に幅広く利活用されることを願っています。

(令和3年8月27日)